

棚次正和先生をおくる

小野 勝彦

教養教育部長・神経発生生物学

八木 聖弥

医学生命倫理学

棚次先生、12年間の京都府立医科大学での学生教育および研究、大変ご苦勞様でした。棚次正和先生は、香川県のご出身で、昭和48年に京都大学文学部哲学科をご卒業され、同大学院文学研究科宗教学博士課程に進まれました。平成4年に筑波大学哲学・思想学系助教授になられ、平成10年に教授に昇進されています。その後、平成14年に、京都府立医科大学に教授として着任されました。この間、平成7年から8年にかけて、米国シカゴ大学神学校・高等宗教研究所シニア・フェローとして海外でもご活躍され、平成10年には京都大学博士（文学）を取得されています。

京都府立医科大学着任後は、1年生と2年生に対して、「倫理学」、「宗教学」、「医療倫理学」を講義されました。特に「宗教学」は先生のご専門とされるところで、すし、「医療倫理学」は10年前、教養教育に新設された科目です。その意味で大きな意義があるといえるでしょう。

カリキュラムの大幅改訂で平成26年度までとなりました「教養ゼミ」では毎年、宮沢賢治を題材の一つに取り上げられました。賢治といえば童話作家として有名ですが、化学や地質学など自然科学にも造詣が深い人物です。一方で青年期に出会った『法華経』を生涯信奉し、その思想を文学によって広めようと思いました。彼は自分の芸術（詩や童話など）を「心象スケッチ」と呼んでいます。そして、自分の生きた時代について、宗教は疲れて近代科学に置換されたと嘆きます。科学は冷たく暗いもので、人の心を救えないというのです。とはいえ両者は矛盾するのではなく、芸術を加えて三者融合させることを理想とします。それはまさに棚次先生の理想に他ならないものと思われま

さらに「人間学」も新しく開講され、「人間」というものを多方面から考察する講義に京都府立大学、京都工芸繊維大学などからの受講生も多数います。全体として棚次先生の講義は、優しく語りかける口調で、好きな教養の科目の筆頭に「人間学」をあげる医大生もいます。また看護学科では「生命倫理」を、大学院では「医学生命倫理学」を担当されています。

また棚次先生は、平成 21 年から 23 年にかけて、教養教育部長を務められました。この時期には、第二外国語のポジションの将来像に関して管理職会議の中で激しい議論があり、棚次先生は奮闘されたとうかがっています。

研究に関して、棚次先生は宗教学研究の第一人者として、多方面でご活躍されています。相対からくる苦しみを超えるために絶対的なものを意識する必要があり、それが宗教である¹⁾というお話から始まり、祈りと平和、祈りによるスピリチュアルケアなどの研究をされています。

棚次先生の学位論文は「祈りの現象学」ですが、これを圧縮して公刊したのが『宗教の根源—祈りの人間論序説—』（世界思想社、1998 年）です。さらに一般の人々も視野に入れて再構成されたのが『祈りの人間学—いきいきと生きる—』（同、2009 年）です。棚次先生によれば、「祈り」とは人間の自然本性に由来する行為・状態であり、宗教経験の原点をなすものです。そして、「祈る」ことは「生きる」ことを根源的に生きること、つまり「いきいきと生きること」と主張されます。

こうしたお考えは、祈りによる世界平和運動を提唱した五井昌久氏（白光真宏会主宰）の影響を強く受けて導き出されたものです。五井氏に関しては『超越する実存—人間の存在構造と言語宇宙—』（春風社、2014 年）の中でくわしく論じられています。さらに『医療と霊性—スピリチュアルにヘルシー・エイジング—』（医学と看護社、2013 年）では、人間のからだを身体・精神に加えて霊性（スピリチュアル）の総体としてホリスティックにとらえ、真の健康を目指すべきであるとのお考えのもと、祈りの実践方法について平易に説かれています。いずれにしても、みずからの宗教体験をもとに人間が存在すること、生きることとは何かを深く追究されました。

近年では筑波大学名誉教授の村上和雄博士（ヒトのレニンの cDNA をクローニングした分子生物学者²⁾）と、祈りによる遺伝子発現の研究を推進されています。村上氏との共著『人は何のために「祈る」のか—生命の遺伝子はその声を聴いている—』（祥伝社、2008 年）では、祈りが良薬であることを論証して、宗教と科学とが相反するも

のではなく、両立するものであるとの結論を示されています。その成果の一つとして、白鳥哲監督の映画「祈り～サムシンググレートとの対話～」があり、棚次先生ご自身も出演されています³⁾。

これらの研究の一端は、授業にも反映されています。棚次先生と先生の講義は、医学を学ぶ者にとって大前提となる人間を考察する上で、非常に重要な存在でした。今後、棚次先生の示唆に富むお考えをどのように受け止めるかが、われわれや講義を受けた医学生の課題といえるでしょう。

最後になりましたが、棚次先生の本学での教育・研究でのご貢献に対して厚く御礼を申し上げますとともに、退職後におかれましてもさらなるご活躍とご健康とをお祈りいたします。

参考

- 1、<http://www.shinkiko.com/interview/template.php?id=111>
- 2、Imai T, et al., Cloning and sequence analysis of cDNA for human renin precursor. Proc Natl Acad Sci USA. 1983 80: 7405-9.
- 3、<http://www.cinematoday.jp/movie/T0014881>